第６回三木市小中一貫教育推進協議会　議事録（要旨）

日　　時：令和５年１月 18 日(水) 午後７時～午後８時
場　　所：市役所５階　大会議室
出　席　者：

構　成　員	山下　晃一	神戸大学大学院	教授
	安藤　福光	兵庫教育大学大学院	准教授
	又吉　健二	三木市区長協議会連合会	
	密　祐浩	三木市区長協議会連合会	
	井上　澄子	三木市区長協議会連合会	
	西岡　寿徳	三木市連合ＰＴＡ	
	吉川　敬二	三木市連合ＰＴＡ	
	阿南　愛	三木市連合ＰＴＡ	
	小紫　達矢	三木小学校　校長	
	長谷川　珠里	吉川小学校　校長	
	藤井　克成	吉川中学校　校長	
	坂田　直裕	別所中学校　校長	

事　務　局　　大北由美教育長、本岡忠明教育総務部長、
横田浩一教育振興部長、荒田知宏教育施設課長、
鍋島健一学校再編室長、武内克朗学校再編室副室長、
河賀健太郎学校再編室主査

１　開会　委員長あいさつ

（委員長）

第６回小中一貫教育推進協議会を開催する。

本日は前回の修正意見を最終確認するとともに、内容を振り返り、成案として確定し、教育委員会に渡したいと思う。

本日が最終回ということもあり、まず初めに、本協議会を通しての私の感想や「はじめに」に込めた思いを皆様と共有させていただく。

審議会というものは形式的なものではないかという指摘もある中、本協議会に関しては、実のある議論を重ねることができたと感じている。

皆様と一緒に先進地視察に行ったり、意見交換を重ねたりする中で、皆様が本気で「三木の子どもたちのこと」や「これからのこと」を考えられていることが、強く伝わってきた。

皆様からは、多くの本音の意見をいただき、非常に深い議論に繋がった。私

も学ぶところが多くあった。また、会が終わる度にまとめてくださるリポート「ふれあい」により、学びを振り返ることができ、次回の協議へと繋がっていた。

以上のような私の思いを詰め込み、意見書１ページ、「はじめに」を書いた。

まず初めに、小中一貫教育の推進、施設一体型一貫校を考えるきっかけにもなった「学校再編検討会議」がまとめた「提言書」について書いた。

次に、「小中一貫教育の現状」、「小中一貫教育推進実践校」について書いた。

最後に、本協議会について、目的、回数、委員の皆様との意見交換、附帯意見について書いた。

続いて、骨子１～４の修正箇所や内容確認を進めていく。

２　意見交換

（１）意見書の構成について解説

（事務局）

「目次」、「はじめに」、「骨子１～４」と続いていく。「子どもにつけたい力」については、これまでの横型の表を縦型にし、見やすくした。

巻末には、協議会リポート「ふれあい」、「三木市小中一貫教育グランドデザイン」、「本協議会の設置要綱」、「本協議会の委員名簿」を資料として付け、このような構成にした。

（２）修正箇所の確認及び意見交換

１　子どもにつけたい力と小中一貫教育の推進

（委員長）

「子どもたちにつけたい力」を身につけるため、小中一貫教育が１つの有効な方法であるという観点から、「子どもにつけたい力と小中一貫教育の推進」という言葉の並びに修正した。

表の中の「できる・できない」という表現については、度合いを表現する「難しい」という言葉の方が適切であると判断し、「難しくなる」と修正した。

（委員）

「②共に生きる力」の欄の「関わっていく力」という表現について、「相手を傷つけない方法を学んでほしい」と書かれているが、「人に関わっていく力」とあえて表現する方が、よりはっきりと対人ということが伝わるのではないか。

（委員長）
あえて表記しても良いし、無くても意味は通じるので、絶対ということではないと思う。
皆様に納得いただけるのであれば、軽微な文言の修正ということで、「人に」という言葉を付け加える。

（委員）
３ページの下に示す「小中一貫教育グランドデザイン」は 19 ページの資料「三木市小中一貫教育グランドデザイン」と繋がっているので、（19 ページ参照）と注釈をつけた方が良い。

また３ページには「小中一貫教育グランドデザイン」と表記されており、言葉の前に「三木市」が抜けているので付け加えた方が良い。

（委員長）
３ページの「小中一貫教育グランドデザイン」の前に「三木市」をという文言、と（１９ページ参照）という注釈を付け加えることとする。

２　施設一体型小中一貫校の導入について

（委員長）
４ページ上部「施設一体型小中一貫の導入」と体言止めにし、「について」という言葉を削除し、他の骨子と表記を揃えた。

施設一体型小中一貫校による新しい環境が生まれ、その環境から教育上の効果が導かれるという文章構成にしたことで、より分かり易くなっている。

年齢層についての表記は、「幅広い年齢層」と表現した。

子どもたちの発達や成長に軸足を置いた表現になるように、「芽生える」を「芽生えが心の成長を促す」へと修正した。

「教員」と「教職員」の使い分けが行われた。教員を識別するのは正しいことである。

（委員）
「授業等」と表記されているので、カウンセラーや事務職員等、授業ではない場面も含まれる。いろいろな人もお互いに乗り入れできると読み取ることができる。

乗り入れできるという意味で捉え、「教職員の乗り入れ授業等」と表記し、「授業のことは教員ですよ」と限定的な説明書きをしている原文の方がすっきりするように感じた。

（委員長）
どのまとまりとして捉えるかによって変わってくる。「乗り入れ授業」についてと限定して考えれば、「教員」の乗り入れ授業とする方が適切であると考える。この点で考えると、やはり教職員という文言では語弊が生まれるように感じる。

文言の解釈としては、「教員の乗り入れ授業等」に、教職員の皆さんの活動も含んでいるというニュアンスを含ませ、理解していきたいと思う。

3　施設整備着手の方向性

（委員長）
前回議論していただいた部分を修正している。

（委員）
意見なし

4　学校施設の将来像について

（委員）
意見なし

3　まとめ
委員長より修正箇所の確認

（委員長）
誤解をより招きにくい自然な表記になった。委員の皆様からの承認をいただいたので、先ほどの修正を施したうえで意見書とさせていただく。

（委員長）
この度、私ども委員一同議論を尽くした。ぜひ三木市のより良い教育を目指してご尽力いただきたいと願う。

委員長が教育長へ意見書を手交

（教育長）
コロナウイルス感染症の影響がまだ見通せず、参集しての協議会を開催することが非常に困難な中ではあったが、小中一貫教育推進協議会を令和４年６月１日に発足し、８か月の間に６回も集まり、協議を重ねていただいた。本当に感謝申し上げる。

現在、三木市内の小中学校が進めている小中一貫教育について、これまでの経緯、意義やねらいを知っていただくとともに、別所と吉川の実践推進校が進めている取組の様子も紹介させていただいた。

今いる子どもたちが、社会の中心として活躍が期待される２０４０年の社会の様子なども共有した上で、子どもにつけたい力について、様々な立場からのご意見をいただいた。

「子どもにつけたい力」については、三木市内の学校にしっかりと伝えていくとともに、家庭教育や社会教育においても活かされるよう様々な機会に紹介していきたいと考える。

施設一体型の小中一貫校については、加東市への先進校視察にも参加いただき、施設の特徴や教育効果について共有した。

三木市がこれまで将来のイメージとして示してきた案はあったが、協議会で議論を重ねる中で、先ずは必要な校数についてモデル校を設置し、その効果検証を行うことの必要性や吉川から着手すべきという方向性についても併せて示していただいた。

学校施設の将来像についても、現段階では、設置すべき学校数を固定して考えるのではなく、諸条件により柔軟に対応していく重要性についてもご示唆いただいた。

併せて、我々教育委員会が今後の取組を進める際の目安となる「附帯意見」も示していただいたので、これらを十分参考にしながら、今後検討を進めていくこととする。

これまで、教育委員会では、のべ４０か所を超える先進校や先進市の教育委員会を訪問し、調査と研究を重ねてきた。

その中で、学校の設置については、２～３年で完了するものではなく、ある程度長い期間を要すると聞いている。

将来、三木市において新たな学校施設が完成した時、本日いただいた「意見書」こそが、その第一歩となったと皆様に報告できるよう、取組を着実に進めさせていただく。

４　閉会

（副委員長）

私もいろいろな教育委員会の会議に出席させていただいているが、大変意見が飛び交った活発な協議会であった。

集まった人のエネルギ―が交差した時に、意見を出しやすい協議会であったように思う。

前回の振り返りができるように配慮された、事務局からの「ふれあい」の存在も大きかったと思う。

本協議会がスタート地点であり、委員の皆様には、三木市の教育・小中一貫教育の良き理解者として、引き続き見守っていただきたいと願う。

ここで言う良き理解者とは、温かい意味での応援や、時には厳しい意見も言えるようなパートナーシップで結ばれた者にあたる。

本協議会が終わった後も皆様には、様々な立場で関わっていただき、地域の一員としてもご尽力いただきたい。また、ＰＴＡや地区の代表の方におかれては、この会議に出ていない人にも伝え広めていく役割もある。

行政の皆様には、意見書に基づき、円滑にかつ慎重に、そしてチャレンジする姿勢で小中一貫教育を推進していただきたい。

私は、地元住民でもなく、少し離れた位置にいるが、良き理解者の１人として、これからも三木市を見ていきたいと思う。